

浮世絵 シーボルト*テイチイ
ング以来、ヨーロッパはつとに

の反映にはかならない。(稲賀)

【項目執筆】『世界から見た日本事典』(ワタナベキヨ)の3項目担当)
(伊東俊太郎編、「浮世絵」「ゴククール兄弟」「ジャポニスム」)

1988年, pp.37-39, 84-85, 91-92.

北斎以下の浮世絵師の作品を招来してきたが、日本美術への関心はおもに陶磁*漆*青銅器に向けられていた。北斎の名が語られ、その『漫画』が浮世絵の代表となるのは一八六〇年代。同時代の浮世絵が安価に輸出された時代につき、八〇年代に代表として、八〇年代にいたってようやく清長、歌麿、春信の名が知られるころには作品の供給は払底し、価格は天文学的に上昇した。九〇年代初頭より、末期浮世絵のけばけばしい色彩よりも古い錦絵、さらには初期単色刷を好む風も生じてくる。もともともゴククール*をはじめとするフランス*勢の北斎びいきは、アンダーソン、フェノロサ*らの室町水墨画理想視とは相容れなかったが、この

対立も世紀末にいたってホイイスラーやゼツエツションの裝飾志向、また今世紀初頭以来の禅*芸術理解の進行にともなって、ゲルマン圏の科学的日本美術史構想のなかで統合されてゆく。

パリ国立図書館蔵デュレ・コレクシオンを除けば、ビュルテイル、ゴククール、ゴンス、ジロー、バルブト、ウエウエル、ハヴィラン等主要コレクシオンを今世紀初頭までに散逸したフランスが浮世絵蒐集の英雄時代を閉じたのに対し、ベルリン、ハンブルク、ドレスデンなどゲルマン圏に組織的な蒐集が成立した。他方、アーネスト・サトウ*アンダーソンの蒐集は大英博物館へ、ドレッサ*顧問のサウス・ケンジントン博物館

は裝飾雛形を多く蒐集した。合衆国の大コレクシオンはボストン(フェノロサ、モース*ビッグロ)、シカゴ(フェノロサ、バッキングガム)、ワシントンのフリア・ギヤラーリ*等に集まった。

ゴッホのものは、アムステルダムに、モネのものはジヴェルニの自宅に保存され、またゴッホのみならず、ジョン・レイト、アストリユック、ラファエル・ジュ、ピサロらの芸術家は貴重な証言を残している。フランス的建築観、エイゼンシュテインのモンタージュ理論での浮世絵のモンタージュ理論での浮世絵研究は、松方コレクシオンの里帰り同様、欧米浮世絵熱の日本へ

を弁じた証言が日記に頻出。

(稲賀)

ゴングール Edmond de Goncourt (1822~96) Jules de

Concourt (1830~70) 最初期の日本趣味者(ジャポニザン)を自他ともに認めるゴングール兄弟の日記には一八六一年六月八日「シナの門」なる店で日本版画に接した驚きが書きとめられている。六七年の画家小説『マネット・サロモン』には主人公が冬の一日極彩色の浮世絵*の世界に浸る姿が描かれ、印象派を予告する。エドモンは弟の死後浮世絵蒐集に財産を傾け、『画家の家』にその愛好ふりを伝える。林忠正の協力下、「日本のウアート」歌麿伝を九一年、「モデルニスト」北斎伝を九六年に執筆したところで「日本の印象派列伝」の計画半ばに逝く。「東洋のギリシア」の「生活芸術」が西欧工芸と色彩派に与えた影響

ジャポニスム Japonisme 輸
出用陶磁器・漆器はいうまでも
なく、一九世紀初頭すでに日本
美術はつとに出島経由で欧州に
もたらされていたが、絵画が民

俗学的興味を超えた芸術品として珍重され、中国産品と區別されるようになるのは、開国後、一八六二年のロンドン万国博へのオールコック*の出品をもって嚆矢とするのが定説である。ほほ時を同じくして英国では、ウイリアム・パージェス、エドワード・ゴドウィン、クリストファー・ドレツサー、ロセツティ兄弟、フランス*では、ゴンクール兄弟*、ビュルティエ、ボードレーール、シャンフルーらが日本趣味第一世代を形成する。熱狂は導火線を伝う火の如く広がった、とは批評家エルネスト・シェノーが七八年パリ博に際して、六七年の万博を回顧して語った言葉であるが、事実日本はサロン絵画のエキゾテイ

ックな主題として、シノワズリーの延長上に利用されるのみならず、工芸品さらには絵画におけるアカデミズムの規矩に再検討をせまる機縁ともなった。

原色の大胆な利用、モンタージュの構成、動きあるデッサンの洗練と瞬間的に印象を定着する誇張省略法、単純な手段によつて達成される工芸の妙、シンメトリーの忌避と具体的有機的かつ動的な釣合感覚等の反古典主義美学を、シェノー、ゴンズ、デュレ、米人ジャーヴェスら当時の美術理論家は日本美術の特質として抽出し、もつて自国芸術刷新の道標とした。ラ・フアー・ジュ・ホイストラ、マネから印象派の画家たち、さらには世紀末のゴッホ、ゴーギャン、ロ

ートレック、ナビ派からアー・ヌーヴォーにいたる感化は今日広く認められている。

徐々に日本趣味が日本学へと変貌するなかで「藝術の日本」誌を発刊したビングや林忠正といった中心的美術商が一九〇〇年パリ万博後まもなく没し、また芸術の前衛たちの関心も裝飾の日本からイスラムの抽象へと移ってゆく。その一方、短詩運動やイマジスムにおける文学的ジャポニスムが二〇世紀の新たな一章を開く。

一九八八年、パリと東京で「ジャポニスム」一大回顧展が催され、モテルニスムの起点となつたブレモデル又日本美術へポスト・モダンの視線をそそいだ。

(稻賀)

エナジー小事典特集目

発行年 一 号 テーマ

編著者代表(敬称略 肩書は発行当時)

- 一九八三年 第一号 「女性史」
山口美代子 国立国会図書館
- 一九八四年 第二号 「日米文化の交流」
亀井俊介 東京大学助教授 アメリカ文学・アメリカ文化
- 一九八四年 第三号 「日本の詩人」
大岡 信 詩人 明治大学教授
- 一九八五年 第四号 「2001年」
吉田夏彦 東京工業大学教授 哲学・論理学
- 一九八五年 第五号 「海外の日本人」
芳賀 徹 東京大学教授 比較文学 比較文化
- 一九八六年 第六号 「映画」
蓮實重彦 映画評論家 東京大学助教授
- 一九八六年 第七号 「世界女性史」
原ひろ子 お茶の水女子大学教授 文化人類学
- 一九八七年 第八号 「地中海」
伊東俊太郎 東京大学教授 科学史・比較文明学
- 一九八七年 第九号 「江戸東京八十景」
芳賀 徹 東京大学教授 比較文学 比較文化
- 一九八八年 第十号 「現代イスラム」
片倉もとこ 国立民族学博物館教授 社会地理学・民族学
- 一九八八年 第十一号 「世界から見た日本」
伊東俊太郎 東京大学教授 科学史・比較文明学

エナジー小事典・第十一号「世界から見た日本」 一九八八年十二月発行

発行●エッソ石油株式会社広報部 東京都港区赤坂五丁目三番三号(郵便番号一〇七七)電話・東京(五八四)六二一一
装幀●勝井三雄 東京都港区南青山五丁目一番十号九〇七

印刷●株式会社第二印刷所 東京都江東区佐賀一丁目一三番一号
エッソ石油株式会社は、アメリカのエクソン・コーポレーションを親会社にもつ日本人で、石油製品の販売に従事して

います。なお、石油化学製品はエクソン化学株式会社でとりあつかっています。
本号をご希望の方は広報部編集室あてに往復ハガキで在庫の有無をお問い合わせください。品切れの場合は御容赦ください。

©一九八八